

僕の好きな映画の爆破シーンを頭の中で再生する。ただし、僕の周りの雑音で音声は無い。

爆破予告されてだれもない病院の廊下に、顔を白く塗って唇を紅く大きめに描いた男がいる。そして、その男は病院に潜り込むためにナース服を着ていた。男が悠然とした姿で歩いている。男が、フレームアウトする前にスイッチを押すが何も起こらない。必要以上で連打するが壊れていると思って投げ捨てる。彼がいなくなったあとに奥の部屋から爆発して、ガラスや壁が粉々になる。あたりが炎と煙に包まれる。ここでシーンが変わる。先ほどの男が病院の外で独り言を呟きながら歩いている。まだ彼はナース服を着ていた。その後ろで建物が爆破されて、コンクリートが大小さまざまな形をして飛んでくる。彼は破壊している病院なんかには興味ももたず、次の犯行を考えていて力強く歩いていた。その光景が彼の顔と服装とがアンマッチで滑稽に見える……。

——僕の妄想が途中なのに、終業のチャイムが鳴る。クラス委員が号令をかけると、教室内に椅子を引く音がやかましく響く。みんなシンクロしていなくて気の抜けた音が、クラス全員の疲労を表現しているようだ。

教師に礼をして、席に着く。その瞬間から、教室中に活気が戻る。クラスメイトと会話をする人間、次の昼休みを前に購買部にパンや食堂に食券を買うに行く人間、他のクラスに遊びに行く人間、漫画や教科書などを読んでいる人間と言う具合にクラス中がグループ化される。

だが、そんな人間達とは僕は違う。僕は、今となっては好きでクラスから孤立している。でも、昔は一人ではなかった。高校に入学したときは、同じ中学の友人がいて何かを話していた。その友人は高校生活になじむようになって新しい友達が出来た。それを知ってから僕は彼から離れていった。

人から見れば、僕は高校でのスタートを失敗してしまって、それが現在も続いていると思われるだろう。嘘をつく必要もなく僕は「独り」だ。来月にある修学旅行の班作りでも、僕はだれとも話し合わずに自分のも席を一步も動かずにただ座っていた。僕の望みとしては一人が良かった。僕のことを無視された生徒と勘違いした担任の女教師が、僕が

どの班にも所属していないことをクラスメイトに注意をしたのだ。それまでは班になった者同士が楽しそうに修学旅行の話をしていたのに、担任の余計な一言がそこに水をさした。また、担任の意見に賛同した真面目な男が僕をグループに入れると言い出した。僕はそれを断ることも出来た。しかし、ここで担任や有志の生徒の意思を無駄にしたら、きっと僕の立場が危うくなると思う僕がしやうがなく折れた。

今話を思い出しているうちに、そんなことはどうでもよくなった。僕は再び自分の意識を教室に戻す。

気がつくとも髪を七三にぴっちり分けて眼鏡をかけた男が前方のドアにいて、教室に入らずに立って時計を確認していた。次の教科である英語を担当している教師だった。始業のチャイムが鳴ると同時に教室に入ってくるという、とても真面目で几帳面で神経質な教師だ。鐘の音よりも遅く入って来たら、生徒だけではなく自分にも遅刻だという己にも他者にも厳しい性格だ。

始業の合図が鳴るとすぐに教師は入ってきた。そして、歩きながら一度眼鏡をかけなすためにブリッジを持ち上げる。その瞬間に教師は生徒に牽制をするようにこつちを睨んでくる。そして、日直の号令とともに椅子の足と床が摩擦をして気分を害するノイズがクラス中に飛び交う。教師は、今度は余計なくらいに満面の笑顔をして全体を見回した後に、「グッドモーニング、エブリワン」と口角をはっきりあげて発音のいい挨拶をする。だが、生徒の返答はまるで幼児の英会話教室みたいにダラダラとしたイントネーションの挨拶である。生徒の発音が悪いのを注意しないでいる教師に矛盾と人間らしさを僕は感じる。

教師は前回までのおさらいを黒板に書いていく。関係代名詞の構文についてだった。「もう一度話をしてあげる」という感じで、とても恩着せがましい口調やトーンであった。そして、復習が終わると教科書の内容へと移る。ステイブ・ホーキングについての話だった。難病を抱えながら、宇宙の謎を解いていく痛ましくも夢のある話だ。僕はすでに読み終えていた。だから、別のことをやると決めている。幸い、僕は、黒板を正面にして一番右側の端の列で真ん中より少し後ろの目立たない位置にいた。今まで僕がその時間の教科と別のことをやっていて注意されたことはない。実際、居眠りをしたり、漫画を読んだり、他の教科の内職をしているわけではない。僕は頭の中で思いついたことを画に書いて、時には文章にしている。作業が詰まったら、たまに顔を上げて板書や校庭を見ているし、ちゃんと課題をこなしている。クラス内の他の三十九名とあまり変わらないはずだ。むしろ、僕はその中でも上位の優等生だと思っているし、思われているはずだ。授業でのやり

取りは自分のことをしながらでも聞ける。教師が「じゃあ、大塚、次を訳してみろ」と生徒を指す。指された生徒の席を確認する。窓側から数えて二列目の一番前の生徒が立っている。この先生は生徒を指す時は一番初めの場所から縦か横に順番に指名するパターンである。僕は安全圏にいた。安心して僕は自分のことができる。僕は真っ白なノートにシャープペンを走らせた。

気持ちが途切れて教室にある時計を見ると、五十分授業のうち三十五分は経過していた。僕のやりたいことが半分はできている。もう半分が納得いかずに考える集中力がなくなってきた。人の話が段々うるさくなってくる。授業をわかっていないヤツが余計な質問をした。その投げかけを待っていたかのように教師が得意げな顔で解説する。前の席の女子が手紙を回していて隣のヤツと仲良くやっているのが目障りだ。

僕は気が散って短気になっている。早くこんな高校から卒業したい。東京大学に入って、自分の考えた世界を世間に知らしめたい。僕は東大に入れて当然の人間なのだから、こんな授業受けなくていいのだ。もし、アメリカだったら僕は飛び級をしてハーバード大学に入れる。そんなすばらしい人間をこんなところに縛り付けておくなんて、僕の時間が無駄になるだけなんだ。ここにいる僕は、本当の僕じゃなくて、偽りの自分だ。僕は教育という国の決めたものに押さえ込まれている。

突然クラスでどっと笑いが起きる。聞いていないが、あの教師が冗談を言ったらしい。どうせつまらないことだと僕はしかめ面をして顔をそむける。

そんな低いレベルの笑い話は僕には必要ない。僕はもっと高尚な笑いが欲しいのだ。終業のチャイムが鳴る。それを聞いた生徒の何人かは、すでに片付けを始める。教師が話をまとめて、号令を要求した。礼が終わって教師が動き出した瞬間から昼休みが始まる。

昼休みになるとリュックからお弁当の入ったコンビニのビニール袋と雑誌を取り出して僕は教室を出る。そして、校舎の四階の隅にある生物室に行く。教室は雑音が多いので、人がいないところで僕は昼食を食べていた。この教室を使っていることは、生物の担当教師には黙認されている。普通の教室より広くて左右の両端には水槽があつて熱帯魚を何匹も飼っていた。後ろでは、生物の標本や模型が置いてある。壁には日に焼けた微生物や人体についてのポスターが貼つてあつた。日の光が入る窓際の席に座り、持ってきた袋からお弁当のおにぎりを取り出して、映画雑誌を開く。中学生の頃から、僕は映画雑誌を購入している。同じ年の人間は漫画雑誌を読んで、友人と人気の漫画やグラビアなんかを語り合うのかもしれない。でも、僕にとってありきたりでベタな行動なので同世代の人間に

埋もれてしまう気がする。だから、年代とは違う没頭できるものを自分とはとことんやっている。いつかは僕が監督で映画を撮りたいと思っている。そんな野心を充足するために映画雑誌を読んで、自分の撮りたい映画の構想を練っている。

映画同好会というのがあるが、レンタルショップから借りてきた映画を視聴覚室で観るだけのつまらない活動をしている。僕は映画を撮りたいのだ。志が違う人間とヌルいことなんてできない。

演劇部で脚本と演出家をやれば、僕の夢は少しでも満足するのかもしれない。しかし、演劇は演劇という表現媒体であって映画と同じではない。演劇は、劇団が公演している期間内に劇場まで足を運ぶのがいいのかもしれない。また、同じお芝居でも役者の出来や席によつては違うように受け取れるのもいいかもしれない。だが、それでは僕の意味や考えが十分に伝わらない。だから、映画なのだ。僕には映画しかないのだ。

雑誌のページをめくりながら、僕を唸らせるものを探す。僕を興奮させるものは、太古の財宝や井戸の水源を探すようなもので簡単ではない。おにぎりを食べ終わっても、包んでいたアルミホイルを小さく握りつぶしながら、未だに雑誌に気持ちを集中させている。集中する時間が長くなると、自分の感覚が段々と失われていく。座っている木の椅子の温もり、銀紙の尖ったところが手に刺さる感触、雑誌の写真がまるで自分の目の前で行われているような錯覚、僕の夢と現実の境が曖昧になっていく。

「おい、お前」

突然、僕しかいない教室に声が聞こえた。僕が雑誌からおそるおそる視線を移すと、顔を白く塗った僕の好きなキャラクターが向かいに座っていた。彼は、紫のジャケットを着て、下は同じ色のスラックスという彼の普段着の格好だった。

「おいおい、死んだ人間が突然表れたって顔をするんじゃないよ」

彼はそう言って笑っていた。

僕の頭が思考できなくらいの喜びに満たされる。

「お前、学校が嫌いだよ。こんなろくでもないところに来て、クラスメイトと仲良く勉強するのが苦手だよ？ 自分は一番で、高校にいる必要はない。むしろ、自分の最も輝く場所をお前自身が解っているから、早くそこにたどりつきたいんじゃないか？」

まさにその通りだった。僕は高校生活にうんざりしている。こんな収容所で、みんな一緒の生活なんてできない。

「実は、お前のことをずっと前から俺は観察していたんだ。そして、さっきお前の望みを

かなえてやったんだ。嬉しいか？ お前、最初の時とは違って、プレゼントを貰ったみたいに目が輝いてるな」

彼はまた笑った。さつきよりもおかしいのか腹を抱えていた。

彼の話は魅力的だった。だから、映画を観ているような目をしてしまったのだろう。

「結論を言おう。俺は、お前が学校に来る時に持ってきているリュックに爆弾を仕込んでやった。どうやったかまでは訊くな、それは企業秘密だ。リュックぐらい大丈夫だよなあ？ また買い直せばいいことだからなあ。俺は、お前に爆発の方法を教えたらここからいなくなる。後は、お前の自由だ」

彼は、古びたジャケットからくしゃくしゃになった紙を出して僕に渡した。

「いいか、そのアドレスにメールを送るんだ。そのときにタイトルは紙に書いてある通りのことを入力するんだ。日本では、爆弾のことをそう呼ぶらしいな。俺の感覚だとさっぱりわからないけどな」

確認してみると紙には「レモン」と書いてあった。

「最後に本文は好きなように書けばいい。嫌いな世の中に対しての犯行声明だったり、この学校ごとお前が吹っ飛ばしちゃうなら家族への遺書だったり、いつもお前が校庭を見るふりをして見つめていたあの子への最後のラブレターだったり、お前の好きなようにすればいい。不安か？ 送信履歴とかでお前が捕まるか心配してるんだろ？ 気にするな、お前のへんてこな文章は起爆装置で別のアドレスを使って転送される。その時には、お前からの受信履歴も無くなるから安心しろ。じゃあ、あらかた説明したから、後はお前のタイミングでやればいい。じゃあな」

彼はそう言い残して颯爽と教室を出て行った。彼が遠くに行けば行くほど、体が透明になって扉の前で消えた。

僕はある男が言ったことをやろうと決意した。彼の話で僕の気持ちが高揚しているのかもしれない。こんなチャンスは二度と無いと思った。まずは、爆弾のアドレスと、それは別に総理大臣と文部科学省と地元の教育委員会と通っている高校のメールアドレスを調べて送信先に入れる。ついでに、自分の両親も加えた。

そして、タイトルに指定されたキーワードを入れて、最後に本文を考える。

『僕がお世話になっていた人達へ』

いつも退屈で刺激の無い毎日を与えてくれてありがとうございます。おかげで、やりたいと思っていることがちつともできなくてストレスが貯まります。でも、このメールが届いているなら僕はそれから解放されたと言うことです。残念ですが、僕は皆さんが考えた教育という小さな枠にとどまろうとは思いませんでした。僕が自由になったら、すぐにでもアメリカへ留学をして、日本のためではなく世界のために、映画界を牽引する人間になります。今までお世話になりました。こんな狭くて幼稚な世界をありがとうございます。

将来のアカデミー賞監督より』

文面を考えて、出来上がると三回読み直して文章を整えた。そして、人気のない下駄箱まで行き、靴を外履きに履き替える。だれもない昇降口で僕は自分の意思を確認する。ここまでなら引き返せると思った。生徒が何人か通り過ぎて行く。僕はもう一度覚悟を決めたことを心の中でつぶやいた。携帯電話はいつでもメールが送信できるようにしているのを確認する。僕は嬉しくなった。校舎を出て一〇メートルくらいしたら、送信ボタンを押すと決める。

校舎の外は晴天で、校庭ではサッカーをしているクソどもがいた。服装でサッカー部だとわかった。サッカー部の人間は、他の部の生徒よりも制服をオシャレな感じに着こなしているのが気に食わなかった。でも、これから起きることでヤツらが、どんな間抜け面になるのか想像するだけで僕は楽しかった。

僕の楽しい気持ちが始の中から決壊して、独り言になって外に出ていった。さっき喋った彼と僕が重なっていく。気分が良くて気がついた時には学校からずいぶんと離れてしまった。僕は止って、携帯電話の画面を確認して、送信ボタンを押す。

しかし、画面には、『送信できません。アドレスを確認してください』とメッセージが出るだけだった。それでも、僕は送信を押し続けた。最後には、同じ表示が出て何も起きないので腹が立ってきて、携帯電話を投げ捨てた。僕は通学で使っている駅に向かって歩き出した。

そして、僕の頭の中ではお昼前の妄想が再生される。さっきは聞こえなかった爆発音が頭の中ではつきりと聞こえた。

〈了〉